

今回、谷干城の思いを語っていただくのは、「ファミリークリニック四万十」院長の溝渕先生です。
「谷干城ミュージカル」の生みの親である先生の干城への思いをご覧ください。

谷干城とわたし 溝渕 和久(琴平町)



この町に来るまで谷干城を全く知らなかった。台地祭と一緒に
なって「谷干城まつり」が始まり、初めて谷干城なる人物を
知った。そして干城が窪川の出身であること、西南戦争で西
郷軍を破ったことや鹿鳴館時代に象徴される欧化政策に真っ
向から反対したことなどを知った。

「谷干城まつり」が始まり、干城を知ってもらおうという功績は
確かにあった。ただ、仮装パレードと辻々で行われる講談師の
語りに合せて町の有志が動作するパフォーマンスでは、インパ
クトが弱いという印象を持った。これをミュージカルで、しかも
街頭で行えば、きっと楽しいものになり、もっとお客さんも呼べ
ると思った。仮装パレードはよく聞かぬが、ミュージカルとなると
例がありません、町の独自性も出せる。



「谷干城ミュージカル」の様子

谷干城の足あと

町内をはじめ全国には、谷干城の功績を称える史跡が残されています。
この特集では、各地にある干城に関する史跡などを紹介し、干城を顕彰していきます。

とくげつろう 得月楼(高知市南はりまや町)

明治3年創業の得月楼は、宮尾登美子著「陽暉楼」の舞
台にもなった高知を代表する老舗料亭。店名の由来は、明治
11年に西南戦争からの凱旋祝いを兼ねた観月会の席で依頼を
受けた干城が、

「近水楼台先得月、向陽
花木易為春」(水辺に近
い高閣は先に月を得る、
太陽に向いている花木は
春になりやすい)
の詩から「得月楼」と命名
したそうです。



干城が命名した「得月楼」

ミュージカルでは、歌える人とバンドが必要になる。幸いこ
の町には女性バンド「シャドー・フィールド」が存在し歌唱力
もある。これに白羽の矢を立て協力をお願いし、快諾をいた
だいた。そして第3回「谷干城まつり」にミュージカルを提案
した。その年は、事業費が減額され従来の演出が困難なため、
ぜひ進めてほしいとなった。それから「谷干城まつり」のメイ
ン事業として街頭ミュージカルが行われることになった。

ミュージカルの台本を書く
にあたって干城をもっと知る
必要があり、平尾道雄著「子
爵谷干城傳」や嶋岡晨著「反
骨谷干城 明治の人」など
を読んだ。より知ってみると
非常に魅力のある人物であ
ることが分かった。清廉潔白で私利私欲とは無縁の古武士的
人物であり、人民の困苦に目もくれない政府の誤った方針に
は厳しい意見を述べる。それが通らなければ要職を辞したりし
ている(農商務大臣や貴族院予算委員長など)。職を賭して
意見を言う政治家が今いるだろうか。利権渦巻く現在の政界
にこそ求められる政治家である。



溝渕先生が参考にした干城の本



谷秦山墓所(国指定史跡)(香美市土佐山田町)

干城の高祖父・谷秦山は、「土佐南学中興の祖」として知
られ、彼の教えは後の土佐勤王党の思想基盤にもなりました。
秦山の墓所には「学問成就の神様」として県内外から多くの
受験生が訪れ、絵馬の代
わりに日章旗に合格祈願を
記して参拝します。また、墓
石は質素な自然石が使われ
ています。この秦山の教え
により干城の墓石も自然石
が使われました。



秦山墓所と合格祈願の日章旗



特集

四万十町が生んだ偉人

谷干城

KANJO TANI



時代は土佐の山間より



平成30年(2018年)は、明治維新(1868年)から150年目にあたります。

四万十町通信では、幕末の志士・明治の元勳「谷干城」の生涯や史跡などを8月から4回
にわたり紹介しています。今回の「谷干城の生涯」では、窪川から高知城下へ移った後の干
城の活躍を紹介します。

谷干城の生涯

【第2回】青年時代～幕末(1847～1867)(著:林一将)

1 干城の元服

嘉永2年(1849)、干城は
13歳で元服を迎え、名前を「詩経」
の節
「趙趙武夫公侯干城」
(猛々しい武夫は公侯の干となり
城となつて国家を護る)

からとり「干城」と改めました。
元服後も、相変わらず手習い
は得意でなかったようですが、弓、
刀剣術を日置流、槍術は新陰流
指南役から伝授を受け、たくま
しい武士に成長していきました。



青年・干城

2 武芸での功績

武芸も上達し、同年では干城
の右に出るものはいないとされ
たそうです。15歳の時、土佐に招
かれた江戸二刀流の剣客「石山孫
六」との御前試合の相手に拔擢さ
れました。試合には負けましたが、
「少年の太刀としては見事なもの」
と称賛され、武芸の功により藩主・
豊信公(容堂)から拝謁を許さ
れました。そして、大いに気をよ
くして次代を見越し、砲術の修
学に打ち込みました。

3 学問への目覚め

18歳の時「安政の大地震」で
被災した干城は、藩が用意した
仮小屋に収容されました。そこで
自分より年少の者が行燈の下で学
問に励む姿を見て、自身の怠慢を
大いに恥じ、以後勉学に励まし
た。

その勤勉ぶりが評判となり、20
歳で藩費による1年間の江戸学問
修行に抜擢されました。いったん
帰国後、学資を借り23歳で再び
江戸へ出て、後に師と仰ぐ「安井
息軒」に学びました。この修行で
干城は人間として大きく成長し、
「桜田門外の変」を見たことで、
学問一途であった干城が日本の動き
にも目を向けるようになりました。



若き頃の「干城」

4 くま子との結婚

文久2年(1862)江戸から
帰国した干城は、父・景井が勤
める国沢七郎右衛門の娘「くま
子」と結婚しました。くま子と
は面識がないまま父を信じて承諾
し、結婚式を迎えたそうです。
以後、くま子は干城の相談相手

であり、夫をよく理解する妻であ
り、同志であったそうです。



干城を支えた
「くま子夫人」

5 攘夷から討幕へ

干城の志士としての活動は、当
初、文久元年(1861)、武市
半平太との会見で尊王攘夷運動
に傾倒し、攘夷実現に向け藩政に
関わりました。しかし、30歳の時
の長崎視察で坂本龍馬・後藤象
二郎らと交わり、危機の本質が幕
府であると悟り、目標を討幕へ転
換しました。

慶応3年(1867)5月、中
岡慎太郎の仲介により乾(板垣)
退助とともに薩摩の西郷隆盛らと
討幕のための「薩土密約」を結び、
大政奉還、戊辰戦争、明治維新
と激動の時代を迎えます。



干城に影響を与えた
「坂本龍馬」「中岡慎太郎」
(国立国会図書館)

干城は二人が襲われた近江屋へ
真っ先に駆けつけ、生涯をかけて
犯人を追ったそうです。